泉澄一先生の御逝去を悼む

原　田　正　俊

二〇一五年三月一九日、関西大学名誉教授泉澄一先生が逝去された。かねてより病気療養中であったが、薬石効なく八二歳の生涯を終えられた。三月二一日に通夜、二二日に告別式が行われ、御家族・親族葬との御意向であったが、関係教員、これまでの受講生など数名が参列した。

先生は、一九三二年（昭和七年）一〇月一二日にお生まれになり、一九五六年、大阪学芸大学（大阪教育大学）を卒業後、小学校、高等学校の教職に就かれるかたわら、研究の意欲を持たれ、一九六六年、関西大学大学院文学研究科日本史学専攻（修士課程）に入学、一九六九年三月に修了された。

大学院在学中は、横田健一教授、有坂隆道教授、薗田香融教授の薫陶を受けられた。横田教授の当時の受講生には、中世史を志す大学院生も出始め、連歌師と戦国大名の研究で知られる鶴崎裕雄氏（帝塚山学院大学教授、現役時の肩書、以下同）、戦国織豊期の石垣普請研究の先駆者、北垣聰一郎氏（東大阪短期大学教授、金沢城調査研究所所長）、民俗学の田中久夫氏（神戸女子大学教授）などが前後して共に学んだ。

泉先生は、大阪のご出身でもあることから商人の歴史に関心を持ち、堺や博多商人などの活動を研究対象とし、戦国織豊期の商人の研究を手がけられた。これらの成果は後に『堺と博多』（創元社、一九七六年）として刊行された。

この書では、堺の有力商人、天王寺屋津田宗達の茶会記『天王寺屋会記』を詳細に分析して、天王寺屋と博多や豊後府内（大分）をはじめとした九州各地の商人との交流が明らかにされた。商人の交流は、平戸・対馬・尾道・播磨・越前など広範に及び、茶会記というこれまで茶道史で主に注目されていた史料を用いて、戦国期の商人の動向を明らかにすることに成功した。天王寺屋の茶会記には、畿内の戦国大名、三好実休（長慶の弟）や本願寺の坊官、下間氏との交流など、この時代の政商としての活動が生き生きと描かれている。

一九七九年三月、日本中世史担当の福尾猛一郎教授の退職に伴い、同年四月、関西大学文学部史学・地理学科に着任された。着任後は、戦国時代の自由都市堺の研究を進め、『堺―中世自由都市―』（教育社、一九八一年）を刊行された。

堺に滞在した、東福寺の禅僧、季弘大叔の日記『蔗軒日録』の分析を中心に、『天王寺屋会記』、イエズス会士の報告をあわせて、自由都市、堺の実態を明らかにした。堺は戦国時代の自由都市として知られるが、イメージばかりが先行し、その実像は十分議論されてきていなかった。その理由としては、度々の戦火に見舞われた堺には史料が少なく、イエズス会士の報告による都市としての性格が象徴的に語られてきた傾向がある。これに対して、先生は、禅僧の日記、商人の茶会記を巧みに使いながら堺の様相を描こうとした。堺の施政権の担い手である会合衆の日常や交流する人々、堺に居住する禅僧の生活、その影響を受ける人々など興味深い様相を浮かび上がらせた。

その後、研究は対馬にのこされている膨大な宗家文書の調査と整理に向かった。晩年に到るまで、宗家文書の分析をもとにした、江戸時代の対馬藩と日朝関係史の解明に精力を注がれた。

『釜山窯の史的研究』（関西大学出版部、一九八六年）、『近世対馬陶窯史の研究』（関西大学出版部、一九九一年）は、日朝交流のなかで展開する近世産業史、技術移転論として注目された。こうした地道な陶器窯の歴史的研究は、陶磁史、茶道史研究者にも注目され、一九九三年、優れた古陶磁研究者に与えられる、第一四回小山冨士夫記念賞を受賞された。

その後も、宗家文書をもとに、『対馬藩藩儒雨森芳州の基礎的研究』（関西大学出版部、一九九七年）、『対馬藩の研究』（関西大学出版部、二〇〇二年）といった大著を公刊された。雨森芳州は、近世日朝関係の中で重要な人物であるが、外交官としてのイメージばかりが強調されるのを批判して、藩政史料に基づいてその実像を明らかにした。さらにこれまでの宗家文書整理の成果を生かして対馬藩の全体像を解明したのが最後の著書である。

近年は、対外交流史が盛況となり、宗家文書や対馬藩の動向は注目されているが、先生のお仕事は、かなり早くからこの重要性に気付き

研究が進められたといえよう。対馬藩関係の著書は、近世日朝関係史の基本図書として、この分野の研究者がまず読み始めるものとなっている。

対馬にのこされた宗家文書は、膨大な量であり、先生は、大学の休暇や少しまとまった休日のたびに対馬に赴き、現物史料のカード採り、目録作成、翻刻に精力を傾けられた。調査の折には、大学院生や学部生を伴われることも多く、その中から、近世の対馬藩と商人の研究をする者も出た。こうした成果をもとに、長崎県から宗家文書目録の作成を依頼され、長年対馬に通い、文化財保護に貢献された。宗家文書は、韓国にものこり、研究専念期間には、一年間、韓国に滞在して、当時閲覧が困難であった韓国国史編纂委員会所蔵宗家文書の調査を進められた。

また、対馬における外交機関である以酊庵には、京都五山の禅僧が幕府の命で赴任しており、天龍寺などから出た以酊庵輪番僧の事績を一人一人紹介されたことも貴重な成果である。

学内では、東西学術研究所幹事となり、上記成果をもとに、東西研の有力メンバーとして調査研究に励まれた。文学部自己点検評価委員会委員長、長年の入試主幹などでも貢献され、史学・地理学科の平常の業務を大いに支えてこられた。学外では、堺市文化財保護審議会委員として、堺の文化財、景観保護にも尽力された。

教育面では、教職経験が豊富なことから、学生への指導も厳しく、また一人一人の特性を生かし、激励して人材を育てることにも熱心であった。先生の着任前、横田教授の提唱で、授業外に大学院生、学生有志が集う中世文化研究会（後に中世史研究会）が結成され、これを指導された。考古学・古代史研究会と並び日本中世史を専門とする学生・大学院生の研究会が活動し始め、中世史専攻の大学院生も増加していった。この研究会は、現在も継承されている。

先生は、温厚かつ朗らかな性格で、派手なことは好まれず、時には厳しく、時には快活に学生たちと向き合う教育者としての実直な姿勢が思い起こされる。謹んで哀悼の意を表したい。

（関西大学文学部教授）